

## // 巻 頭 言 //

社会福祉法人日本ライトハウス  
法人本部長 内山 督

私は、現法人に入職してから、多くの期間をいわゆる「視覚リハビリテーション」と分かりやすい形で関わることなく経過してきた、と自分では感じている。分かりやすい形がどのようなものか、狭い捉え方であるかもしれないが、例えば歩行訓練であるとか、日常生活動作に関する訓練だとかをイメージしている。これまで出会ってきた人と、そういった視点で関わったことなく、この「視覚リハビリテーション」の巻頭言を書くことに戸惑いを感じているのが実際である。そんな私が、リハビリテーションという言葉に抱いているイメージや、こうあって欲しいと感じることを少し書いてみたい。

リハビリテーションは、医療や福祉・介護の分野で広く行われており、「リハビリ」や「リハ」という呼び名も含めて、言葉は一般的に使用されている。そこには、機能の回復や維持・向上を目指して、さまざまな支援を行う支援者の存在とともに、主体者となるいわゆる「患者」・「利用者」がおられる。支援者は多くの場合、明確な意思と目標を持って支援に臨むのであろうが、支援目標の達成に向けて最も大きな力となる「患者」や「利用者」と呼ばれる状態にある人の意思が、支援場面でどのように引き出され、活かされているか、悩ましいケースもあるのではないだろうか。主体者が、意思をもってリハビリテーションに取り組まれるようになれば、支援者の存在なくとも、日々の生活場面全般が、その人にとってのリハビリテーションになるだろう。そこには、客観的な評価としての機能回復や維持・向上のみならず、主体者自身の「自分は、こうありたい」という思いが必ず存在すると考える。

しかし、最も大きな力となる、主体者の意思の存在に、本人自身が気付くことなくリハビリテーションが行われるとしたら、なんと勿体ないことだろうか。この「自分は、こうありたい」という意思をどの程度明確に意識できるかで、リハビリテーションの成否が大きく違ってくると思われる。支援者と出会う場

面のみ、指示されるリハビリテーションに取り組み、あとの一日・一週間・一ヶ月の大半を漫然と過ごすのか、自身の進む道を意識し、日々の生活が「こうありたい」に向けた積み重ねになるのかで、大きく違ってくる。

こう書くと、リハビリテーションには、とてもストイックな取り組みが要求されるように感じられもするが、生活習慣病の予防なども含め、生活全般に関わり、継続性が要求されることには、少しずつ長く行うという意味の存在は欠かせないものであろう。こうしたことから、支援者の役割として、主体者が自らの意思に気づくまでの働きかけは、欠かすことのできないものであろう。

主体となる人が、自らの意思を意識するために、支援者は、どのような存在であるべきなのか。とても抽象的で、掴みどころのない関係からスタートするのかもしれない。たとえ遠回りに感じられたとしても、主体となる人の内にある意思に気づき、それに寄り添うことでしか、普遍的で継続的なリハビリテーションは成立しないと考える。

「視覚リハビリテーション」の場面においては、視覚に何らかの障がいのある主体者と、支援者との関係性が存在する。その関係の中で、主体者が「視覚に障がいがある」こととどのように向き合っているのか、または向き合えていないのかを見極めることが支援者に求められることもあるだろう。また、主体者の抱えている課題が「視覚に障がいがある」ことを主な着眼点とした支援で、軽減や解消が可能なのかという気付きから、総合的な支援の実施が求められることもあるだろう。

出会のきっかけは「視覚に障がいのある〇〇さん」と、「視覚に障がいのある人に支援を行っている機関や人」ということであつたとしても、そこから進むべきは、柔軟で多様な道筋や地平である。リハビリテーションが、主体者にとって意義あるものとなるよう、道筋の開削と、地平の開拓に寄与する「視覚リハビリテーション」であり続けて欲しいと願っている。